



[講演]

留学生と日本人学生の 協働がもたらす学び —異文化コミュニケーション 学部の実践—

立教大学異文化コミュニケーション学部長
同学部異文化コミュニケーション学科教授
浜崎 桂子 氏

○小林 巖先生、ありがとうございました。

続きまして浜崎先生のご講演です。タイトルは、「留学生と日本人学生の協働がもたらす学び—学部を越えた実践—」です。よろしくお願いいたします。

○浜崎 ご紹介いただきました、異文化コミュニケーション学部、学部長をしております浜崎でございます。よろしくお願いいたします。【スライド④-1】

本日は異文化コミュニケーション学部でどういうふうに留学生と日本人の学生が協働しながら学んでいるかということをお話したいと思います。異文化コミュニケーション学部は学部の理念そのものが、他者と出会う、他者と向き合う、それからさまざまな多様性を理解する、そして違いと違いをつなぐために自分が実践していくことを目指しており、そういった学生を学部から社会へ送り出したいと考えております。つまり、今、巖先生のお話にもありましたけれども、学部をグローバルな場にする、学部に多様性を創るということが、私たちの学部のそもそものミッションだと考えております。【スライド④-2】

このためにどんなことをしているかということ、本日は4点、お話ししたいと思います。異文化コミュニケーション学部で、多様性をどう創っているか。一つ目には、留学生をどういった入試で受け入れているかというお話、それからともに学ぶための仕組み、特に1年次の教育でどういった試みを行っているか。そして協働のための仕組み、これは学部で行っています社会連携活動で、留学生と、いわゆる普通の日本人学生がどういうふうに協働をしているか、それがともに、それぞれの学びにつながっているか、それから、学部で創っている多様性を、

どういうふうに関社会へ発信しているか。その試みについてもお話をさせていただきたいと思ひます。【スライド④-3】

本学部では外国人入試を2種類行っています。立教のほかの学部は、いわゆる日本留学生入試を使って入試をしておりますけれども、本学部ではそれを使っておりません。いわゆる秋季入試において外国人入試を行い、これは筆記試験と、実際に面接をして、志望理由などを主に確認をします。私たちの学部で学びたいことがあるか、それを学ぶことで何をしたいかというモチベーションの部分を中心に入試を行っています。

それから、立教では、来日しないで入試ができるという体制を全学的につくっていくことが議論されていますけれども、私たちの学部では既に、すごく小さい枠ではありますが、書類選考のみでの試験というのを行っています。こちらでは、英語のスコアと日本語のスコア、それから志望理由書、この3点で査定をしています。英語がある程度できるということと、それから日本語については、17年まではN2のレベルを求めていたんですが、学生の多様性を増やしたいということで、今はN3を一応条件という形でやっております。

それとは別に海外指定校をつくりまして、そこから優秀な、そして立教異文化でぜひ学びたいと考える学生たちに進学してもらうというシステムをつくっています。中国の2校というのは、これは上海外国語大附属と、それから上海にあります甘泉高校、こちらはどちらも日本語で高校の学びを行うコースを持っている高校です。同時に2校とも英語で学ぶコースも持っています。これまで入ってきた学生さんたちは日本語コースで学んできた学生たち、つまり入ってきた時点で、既に日本語で高校教育を受けてきている学生たちです。今年初めて英語コース出身の学生を受け入れました。この学生は入学が決まった時点から一生懸命日本語を勉強して、9月に私たちの学部に入学してきています。日本語も集中的に勉強しつつ、ただ私たちの学部では、1年生の必修科目を英語でも展開しておりますので、そちらは英語で履修をしながら、日本語力を高めているところであります。今、1学期目です。

シンガポール、こちらは日本語が未修の学生を受け入れるということで、いわゆる学力の高い、それからモチベーションの高い、そして英語ができる学生をターゲットにしています。残念ながらまだ実績がありません。これが私たちの学部の1つ課題になっています。【スライド④-4】

こういった形で、じゃあどういう国、地域から留学生が来ているか、16年以降の数字をお示ししています。経済学部比べると、私たちの学部は本当小さい学部で、1学年145名です。1学年145名の中、16年以降、大体20名前後の人数の留学生を受け入れています。20%にはいかないけれども10%は超えている感じです。中国、韓国はもちろんたくさんの留学生が来てくれています。そのほか、ベトナム、マレーシア、シンガポールといったアジアの国々、台湾はもちろんですね。それからブラジル、スペイン、ペルーといった国々、また今年はイギリス、アメリカという英語圏からも来ています。これまでの実績でも、ヨーロッパから、例えばフィンランド、スウェーデンなんかからも学生が来て来ています。

私たちはまだ海外向けの広報を、きちんとターゲットを決めてできていないんですけれども、これだけ来てくれているのは、先ほど申し上げた入試の形態というのが、いろいろなタイプの学生さんたちにとってトライアルしやすい形になっているのかなと思っています。【スライド④-5】

このようなさまざまな学生たちが、どういうふうに学部の中で一緒に学んでいて、グローバルな姿勢を身につけていけるかということを考えるときに、1年次の着地のところが非常に重要だと考えています。これはもちろん留学生だけの話ではなくて、普通に入学してきた学生にとっても、1年次、どういうふうに大学での学びを身につけるか、学部の専門性に対する関心を持つことができるか、そして一緒に学ぶ仲間たちと関係をつくっていくことができるか、これはとても大事なことだと思っています。

1年次必修の「基礎演習」という授業は、春学期、秋学期、1年次に2学期間取る授業です。そもそもこの授業を開発したときには、留学生対応ということではなくて、いかに異文化に迎え入れた学生たちが、アカデミック・スキルを身につけ、そして異文化に対する関心を深め、ともに議論する中で他者とのコミュニケーションを実践していく力をつけることができるかということが、主な関心でした。

協同学習というメソッドを使いまして、アカデミック・スキルの養成を行っています。各クラス20名程度で、さらに授業内の活動は、グループワークで行っています。各グループが4、5人ということになります。グループは毎回、大体メンバーを変えながら行きますけれども、クラスのメンバーは1年間一緒です。

テキストは異文化のさまざまな専門領域の入門的なもの、秋学期になりますと少し専門的な論文も含めて読みます。各自が予習をしてきたうえでグループでの議論をし、それぞれの自分の解釈や自分の意見について議論を戦わせるということを行います。

またそこから発展させて、自分でテーマを見つけ、口頭発表をする、グループ発表をする、そしてそれをもとにレポートを仕上げていくということを行います。レポートを仕上げていくときにも、レポートの書き方についてのレクチャーをしながら、学生同士がお互いにレポートを読んで、仲間のレポートを添削したり、批判したりしながら、レポートを仕上げていくということを行っています。こういうお互いに学び合う、Learning Through Discussion というメソッドによって、学生同士が共に学ぶということが、この「基礎演習」の仕組みになっています。

ここに、1 学年全体で 20 人程度留学生がいますと、必ず各グループに 1 人か 2 人は留学生がいるということになります。そして、共に学び合うときに、いろいろな地域、文化のバックグラウンドを持った、また日本語も、多様な日本語を話す学生が、そこにいつも必ずいるという体制がつくれています。今日は、こういうテーマなので、留学生と日本人学生という切り方をしていますけれども、日本人学生の中にも、海外経験のある学生、親の文化背景が違う学生、さまざまな学生がいますので、このディスカッションの中で、例えば日本の中の多文化状況について議論をしたときに、シンガポールの経験を持っている学生、中国の経験を持っている学生、そういったさまざまな学生が、多様な視点を持ち寄り議論ができるという仕組みです。ここに今、留学生たちが、各グループに 1 人、2 人、入っていることで、その議論がより複層的なものになっているのではないかと思います。【スライド④-6】

ただ、4 月、大学に入って一学期目の「基礎演習」の授業は、普通の日本人の学生にとっても、読むテキストの量は多い、毎週予習はしなくてはいけない、2、3 週間に 1 回、レポートを、短いものだけでも、書かなくてはいけない。相当ハードな授業になっています。日本語母語でない学生にとってはなおさらです。ここをどうサポートするかということで、4 年ぐらい前から、「基礎演習」の授業について、留学生に、日本で育っている学生がバディとしてつくという体制をつくりました。

いろいろ試行錯誤があるのですが、学期初めに、まずサポーターたちを募集し、

留学生と1対1のペアをつくります。そして予習の支援をします。予習していてもどうしてもわからないところがあれば、その確認をする、来週発表だというときには、その発表の練習を一緒にやる、レポートを提出するときには、そのレポートの添削をするというような活動を行っています。

このサポートがあることによって、留学生は自分ひとりで予習しているときよりは、少し自信を持って、授業で議論と一緒に入っていくことができる、発表ができるというような形がつくれています。

同時にバディにとっても、これは重要な学びの機会だと私たちは考えています。この間ちょうど、バディとサポートを受けている留学生の中間報告会というのがある、そこで学生たちの感想を聞いてきたんですけども、留学生のレポートの添削をしている学生たちは、自分のレポートも、今までよりも意識して、スタイルや文法に気をつけて書くようになったと言っています。母語ですと意識しないで書くので、逆にひどいレポートってあるんですね。それが日本語を学んでいる学生のレポートを読むことによって、文法構造がどうなっているのか初めて意識して、それを自分の書くレポートに生かしていくことができるようになったというような学びがバディの側にもあります。【スライド④-7】

ただ、この活動もいろいろな課題をまだ抱えています。1つはサポーターと留学生のマッチングです。とても熱心に毎週、週に1回も2回も活動をしているペアもあれば、なかなか活動が進んでいないペアもあるというのが実情です。このバディ制度は4月のスタートがとても大事で、その時点でサポート体制があるということが重要なんですね。4月の時点ですと、当然サポーターに入ってくるのは2、3、4年生ということになります。この間聞いた話では、4年生は就活で忙しいし、申し訳ないから会ってくださいとお願いができませんでたと言っている謙虚な留学生もおりまして、逆に2年生、3年生にサポートに入ってもらって、レポートの添削をするときも、きちんと説明をしてもらうことによって、すごく安心できた、上級生のほうがよかったという学生もいました。

秋学期には、1年生同士でのサポートというのも始めています。つまり同じ「基礎演習」の授業に出ている学生で、日本人の学生がサポートをし、留学生がサポートを受けている。そうすると同じ授業を聞いているので、あ、課題出たね、という点は同時に承知していて情報共有する必要がないわけです。そのため、とてもスムーズにサポートができていて、同級生だから良いと言っている留学生もい

ました。これは、学生のキャラクターであるとか、いろいろな要素によって、どういう組み合わせがよりやりやすいかということが異なり、個別に、ニーズは異なるので、そこを今後どうマッチングしていくかが1つの課題です。留学生の日本語の能力も多様なので、どういうサポーターがつくと効果的かということはどう測っていくかも重要だと思っています。

あとは、サポートの効果をどう伝えていくか。例えば留学生でも日常のコミュニケーションには困らない、高い日本語能力を身につけている学生は、最初、自分にはサポート要らないと思いがちなんですね。ただ、レポートをきちんと書いていくときに、やはり母語話者の目というのはあったほうがいい。その必要性をどう伝えていくか。それからもう一つは、サポート学生に、効果をどう伝えるかです。例えば、自分も来週までレポートを書かなきゃいけないのに、ほかの人のレポートの添削をするというのが時には負担だったりする。だけどそこを乗り越えたときに、彼女、彼らが何を学んでいるかを何か先に見せることができたらなということも考えています。【スライド④-8】

これが「基礎演習」の話、1年次の授業内での話だったんですけど、そのほかに学部としては、学部の理念を実現していくために、社会の多様性を学生たちが知るための仕組み、そしてそこにかかわっていくための仕組みというのをつくってしまっていて、学部で社会連携活動を行っています。今、主に4つあって、外国人生徒のための学習支援、これは近所の中学校の日本語ができない生徒たちに、授業への入り込みで学習のサポートを行っています。例えば中国から来ている留学生、あるいは中国語が得意な学生が授業の中に一緒に入って、教師が日本語で言っていることを中国語にして中学生の学習のサポートをする。あるいは放課後、中学生に立教に来てもらって、なかなか宿題を1人でできないといった生徒さんたちに立教の学生がその宿題のサポートをする。宿題のサポートだけではなくて、日本の中学校の生活の中に入っていくときに彼らが持っているさまざまな壁を越えるためのサポートというのをやっています。あとは在住外国人向けの立教日本語教室というのを週2回やっています。

それから小中学生に、英語で活動する時間を提供する English Camp という活動を行っています。土曜日の数時間、豊島区の小学生、中学生を相手に、英語で遊ぶ、英語で歌う、その英語のアクティビティによって、彼らが英語を使うことに対する心理的なハードルというものを超えてもらう。いろいろな人とコミュニ

ニケーションすることが楽しいと思ってもらう、そういったプログラムです。今年の夏は初めて、岩手県の陸前高田に行ってこの English Camp をやりまして、陸前高田の中学生に対してプログラムを提供しました。

あと地域通訳、翻訳のプログラムというのをつくってしまして、RiCoLaS というグループが、学内、学外のさまざまな場所で、翻訳や通訳が必要な場で実践をして、そこで学習させていただくということをやっています。これは短期日本語プログラムともさまざま連携して活動をさせていただいています。【スライド

④-9】

ちょっとだけ写真をお見せします。これは短期日本語プログラムの際のものですが、RiCoLaS の学生たちが浅草で、あるいは立教の中で特外の学生たちが弓道を体験する場で、通訳、翻訳をしています。こちらは、陸前高田で English Camp をしたときなんですけど、正規留学生、特別外国人学生、日本人の学生がチームになってプログラムをつくり、中学生たちに英語で過ごす時間というもの2日間にわたって提供しました。

こういった活動は、もともと留学生のために始めたプログラムではなくて、本学部の学生たちが社会の中の多様性を知り、そこにかかわるという目的のためにつくったものなんです。ただ、ここで留学生の力というのが生かされています。彼らが持っている複数言語能力ですね。それぞれの自分の言語、それから日本語を学んだ体験、こういったものが、例えば日本語教室、外国の生徒たちへの学習支援というところで非常に役立っています。さらに、彼らが日本の社会をちょっと外から眺めている視点というのが、どういう支援をしてあげたらいいんだろう、どういうことに困っているんだろうということを学生たちが考えるときに、生かされている。そして、生かされているということが、彼らにとって自信になるということです。まさにこれは、日本社会が多文化化していくときに、社会が持っているべき力、必要な姿勢であると思います。それを、私たちの学部では、小さい規模ではありますが、少しずつ実践できているのかなと思っています。【スライド④-10】

もう一つ、さっき経済学部での留学生支援のための学生組織のお話のご紹介がありましたけれども、本学部では、特に留学生のためのものではないのですが、学生団体 LINK というのをつくっています。きちんとした組織には実はなっていないけど、委員長も副委員長もいないんですけど、学生たちが自分から行動して、

何か学部のために行動する場になっています。

例えば真面目なものと、公開講演会をやったり、学生向けのイベントや、中国語でしゃべるカフェをやったりしています。また親睦を深めるためには、新入生ウェルカムパーティーをしたり、スポーツ大会をしたりという、さまざまな親睦会が企画され、プロジェクトベースでいろいろなグループが立ち上がっています。学部としては、新入生に活動紹介をするとき、プレゼンをする先輩たちの中に必ず留学生に入れてもらうというような仕掛けはしたんですけども、今では自然に留学生がこういった活動に参加するという体制がだんだんできてきています。

今年は何をやってきたかという、学生たちが中心になって、学部主催講演会ということで、「フードダイバシティ」をテーマに講演会を行いました。それから東南アジアの学生たちが中心になって、「HALAL MAP IKEBUKURO」というものを作成して、今配布しているところです。

ちょっと写真を見ていただきます。この講演会は株式会社フードダイバシティ代表の守護彰浩さんという方に、学生が自分でコンタクトを取って、ノーギャラだけど来てくれないかと言って、講演会を企画しました。その企画が学部が上がってきたときに、いやいや、ノーギャラじゃ悪いんで学部からお金出しましょうと言って、謝礼はお支払いしましたが、この企画に日本人の学生、正規の留学生、特外の学生が加わって、パネルシンポジウムをしました。**【スライド④-11】**

本日、ハラルマップを作ってくれた2人が来てくれています。シンガポール出身のイップさんそれからインドネシア出身のウィニーさん、このハラルマップとフードダイバシティの講演会、どんな目的でやって、何が大変だったか、ちょっと教えてください。

○ウィニー ではまず、フードダイバシティについて話します。私はインドネシア出身ですが、去年、立教に来た、インドネシアの交換留学生と話す中で、留学生がムスリムの方



異文化コミュニケーション学部 2年
チュワンデン・ホウワイイップ

だとわかり、ハラル食について話してくれました。その学生さんから、日本ではハラル食を探すのが結構難しいねという話があったので、何かできればなと思って、ハラルマップはいいなと思ってそれをつくりました。

○**イップ** 困難なことは正直ありませんでした。なぜかというと、この活動は先生たちも賛成して、いろいろなアドバイスをもらったし、お店の方も喜んですぐ許可をもらいました。なので、困難なことはないです。(拍手)

○**浜崎** 困難なことはないと今言ってくれましたけれども、全てのお店を回って、許可を取ってきてくれました。またこれを Web に載せようといったときは、もう一回許可を取りに行き直してというふうに、何度も足を運んで作ってくれたハラルマップです。立教異文化のホームページからダウンロードできますので、どうぞご活用ください。

それから、こういった多様性を私たちの学部では、学部のミッションとして学部の中につくっていますけれども、これを社会の中に発信していくということを考えています。また、そのことを留学生たちの大学で学んだ後のキャリアに結びつけていきたいと考えています。

留学生というのは、大学で学んだ後、非常に多様な選択肢を持っています。日本で仕事をするのか、母国に帰って仕事をするのか、それとももっと別な場所に行くのか、日本で生まれ育った学生よりもさまざまな選択肢を持っている。そのときに、これだけ優秀な学生たちなので、日本にいてもらいたいなという思いはあるわけです。そのため、学部の中では「キャリア実践演習」という日本での就職を選択肢として現実に考えてもらうための授業を展開しています。例えば日本の就職のシステムはどうなっているのか。ES というのは何を求められているのかというようなことを考え、実践的に書いてみるというような授業です。

それから、17年度より、毎年1回、「キャリアシンポジウム」という名前で、学部の多様性を創る試みについて発信する場を設けています。これは、学部の教員が講演を行ったり、あるいはゲストに来ていただいてパネルディスカッションを行ったり、その中で異文化の卒業生、留学生で卒業生、あるいは今学んでいる留学生に登壇してもらったりということを行っています。

留学生たちがどんな活動、活躍をしているかを企業の人事の方に実際に見てもらいたいというのがこの企画の一番大きな目標なので、学生たちによる活動についてのポスター発表も行っています。発表するのは留学生がメインで、日本語母

語話者の学生たちが、メンターとして、ポスター作成、発表の練習を一緒に行い、そして発表の現場にも立ちあい、一緒につくり上げていきます。これが先日、10月31日に行ったときの写真ですが、留学生たちが、自分がやった活動について報告しています。例えばこの写真は中国から来た4年生ですけれども、国際協力NGOでのインターンについて報告をしてくれています。こちらの学生は台湾から来た、まだ1年生なんですけれども、陸前高田でやったイングリッシュキャンプについて報告をしています。こちらの彼女も1年生で、豊島区でやったイングリッシュキャンプについて話をしています。ここで、ウィニーさんはハラルマップの話をしています。この台湾の彼は日本語教室について、どういうふうに展開しているかという話をしています。

ここへ来てくださる企業の人事の方は、本当に大きな関心を示してくださいまして、ポスターの発表を熱心に聞いて、学生にいろいろな質問を投げかけてくださっています。今回は、35社ぐらいの方が来てくださいました。この企画は、大きな打ち上げ花火にはなっていないんですけれども、小さい多様性を広げていく試みです。このような試みを、今後もコツコツ続けていきたいなと思っています。そして、ここでも留学生と日本語母語話者の学生とが一緒に学び、それぞれがそれぞれの学びを得ることに結びつけていけたらと思っています。【スライド④-12】

以上です。ありがとうございました。(拍手)

【スライド④-1】



留学生と日本人学生の協働がもたらす学び
—異文化コミュニケーション学部の実践—

異文化コミュニケーション学部長 浜崎桂子

2019年12月7日
CJLE シンポジウム

【スライド④-2】

異文化コミュニケーション学部  立教大学

学部の理念

「他者」と向き合い、「多様性」を理解し、
「違いと違いをつなぐ」ために実践ができる学生を
社会へ。

⇒学部に多様性を創ることがミッション

【スライド④-3】

 立教大学

1. CICの「多様性」 — 留学生受け入れ
2. 共に学ぶための仕組み — 初年度教育
3. 協働のための仕組み — 社会連携
4. 社会への発信 — キャリアサポート

【スライド④-4】

1. 多様な留学生の受け入れ

 立教大学

「外国人入試」

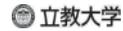
- 秋季入試(定員7名):
日本語筆記試験、面接(提出書類:英語スコア、志望理由書)
- 書類選考(定員5名):
英語スコア(IELTS 6.0、TOEFL iBT 80)、日本語スコア(2017年度までN2、2018年度からはN3以上)、志望理由書

「海外指定校」

- 中国2校、シンガポール2校

【スライド④-5】

1. 多様な留学生の受け入れ



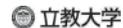
1学年145名中

2016	19名	中国9,韓国3,香港2, ベトナム・ブラジル・台湾・スペイン・ペルー各1
2017	21名	中国10,韓国4,ベトナム3,マレーシア2,香港・カナダ各1
2018	18名	中国7,韓国4,インド・ロシア・シンガポール・インドネシア・ ベトナム・台湾・香港各1
2019	20名	中国7,韓国5,マレーシア3, シンガポール,ブラジル・台湾・英国・米国各1

* 外国人入試,海外指定校,
国内インターナショナルスクール(指定校)を含む。

【スライド④-6】

2. 共に学ぶための仕組み



初年次「基礎演習」

- ・「協同学習」によるアカデミック・スキルの養成
- ・各クラス20名程度／4～5人のグループワーク
- ・テキスト読解、議論、口頭発表、レポート

Learning through Discussion

- ⇒ 「協同」して学ぶメソッドでの実施
- ⇒ 各グループに1～2名の留学生

【スライド④-7】

2. 共に学ぶための仕組み

立教大学

「基礎演習」 — 留学生サポートバディ

- ・学期始めに募集
- ・1対1でのサポート
- ・予習支援、発表練習、レポート添削

⇒留学生: 自信を持って授業に取り組む

⇒バディ: 説明することを通しての学び

【スライド④-9】

2. 共に学ぶための仕組み

立教大学

課題

- ・サポーターと留学生のマッチング
 - 学期開始直後のサポートの重要性
 - 個別のニーズの違いへの対応
- ・サポートの効果をどう伝えるか
 - 留学生／サポート学生
 - それぞれの学びの可視化→動機づけ

【スライド④-8】

3. 協働のための仕組み—社会連携 立教大学

社会の多様性を「知る」&「かかわる」

学部社会連携活動／サービスラーニング科目

- 外国人生徒の「学習支援」
- 在住外国人向けの「立教日本語教室」
- 小中学生が英語で活動「English Camp」
- コミュニティ通訳・翻訳「RiCoLaS」

【スライド④-10】

3. 協働のための仕組み—社会連携 立教大学

学部社会連携活動／サービスラーニング科目

留学生の力／強みを生かすプログラム

- 複数言語能力／日本語を学んだ経験
 - 「マイノリティ」としての社会への視点
- ⇒ 日本社会の多文化化のために必要な力

【スライド④-11】

3. 協働のための仕組み—学生団体 立教大学

学生団体 LINK-CIC (& Co.)

学生が自ら行動し活躍する場

- 公開講演会、学生向けイベント、親睦会の企画開催
- 学部ニューズレターの企画・編集・発行
- 講演会「Ibunka Lecture～Food Diversity」(6/26)
- HALAL MAP Ikebukuro

(作成: SEAGULL、10月プレスリリース)

【スライド④-12】

4. 社会への発信—キャリアサポート 立教大学

多様な選択肢を持つ留学生たち

「キャリア実践演習」

日本での就職という選択肢を現実的に考えるために

キャリア・シンポジウム開催(2017年より3回実施)

社会に多様性を創るための発信

多様な留学生の活躍を知ってもらうために

留学生によるポスター発表(メンター学生との協働)